

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第14集

しら した ほん じゆく
白 幡 本 宿 遺 跡 (Ⅱ次)

1982

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

浦和市白幡本宿遺跡は、貴重な埋蔵文化財が多数包含され、昭和51年には、白幡中学校校庭の発掘調査が、浦和市教育委員会により実施されています。

隣接の浦和商業高等学校では、体育館建設等、施設整備を進めてまいりましたが、この工事に先立ち、発掘調査を実施し、記録保存の措置がとられました。昭和54年度には、体育館建設に伴う発掘調査が埼玉県教育委員会によって実施され、さらに今年度、旧校舎の改築工事にかかる発掘調査を、当事業団が埼玉県より委託を受けて実施し、ようやく報告書刊行の運びとなりました。

この間、多大の御助言、御協力をいただいた関係諸機関、地元関係者の方々に改めて深く感謝いたします。

なお、本書が文化財保護の目的だけでなく、教育文化及び学術研究の資料として広く活用されることを希望します。

昭和57年3月

財団法人

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長 井 五 郎

例 言

1. 本書は、埼玉県立浦和商业高等学校改築工事にかかる白幡本宿遺跡（昭和56年8月11日、委保第5—1796号）の発掘調査報告書である。
2. 調査は埼玉県の委託により、財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、昭和56年8月3日から8月20日に亘って実施し、整理・報告書作成作業は、昭和56年度に受託し、実施したものである
なお、調査の組織は一—2—ページに示したとおりである。
3. 出土品の整理および図の作成は、村田健二・石川俊英・丸山謙司が主にあたった。
4. 発掘調査における写真および遺物写真は村田健二が撮影した。
5. 本書の執筆は文末に記したとおりである。
6. 本書の編集は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究部第四課職員があたり、横川好富が監修した。
7. 本書を作成するにあたり、下記の方々から御教示、御助力を得た。

松 尾 範 方 増 田 修

目 次

序

例 言

I	発掘調査に至るの経過	1
II	遺跡の立地と環境	3
III	周辺遺跡の概要	6
IV	調査の経過	7
V	遺構と出土遺物	8
VI	結 語	12

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置(1)	3
第2図	遺跡の位置(2)	4
第3図	周辺遺跡	7
第4図	遺構配置図	8
第5図	土層柱状図	9
第6図	第1号住居址実測図	9
第7図	第1号住居址実測図	10
第8図	第2号住居址実測図	11

図 版 目 次

図版1	調査区全景、第1号住居址、第2号住居址および室状遺構
図版2	第1号住居址全景
図版3	第1号住居址、古瀬戸出土状況、古瀬戸出土状況（近影）
図版4	第1号住居址炉址、室状遺構
図版5	室状遺構断面図、室状遺構入口部
図版6	粘土ブロック出土状況、木炭出土状況

I 調査に至る経過

白幡本宿遺跡内に所在する県立浦和商业高等学校については、すでに昭和54年6月～7月に体育館新築に伴って県文化財保護課が発掘調査を実施している。この調査では、弥生時代末～古墳時代初頭の集落跡と古墳跡等が発見され、すでに報告書も刊行されているため広く周知されている。

浦和商业高等学校では校舎の老朽化に伴って、順次改築を進めてきたが、今回は前回調査をした体育館の北側の校舎の建築であり、前回の調査結果からも当然遺跡の所在は予想された。このため県住宅都市部からは事前に「建設予定地内における文化財の所在及び取扱いについて」（昭和55年7月19日付け営第206号）という照会文書が県教育長あて提出された。文化財保護課では前回の調査成果を基にして、昭和55年7月30日付け教文第432号をもって回答した。その主旨は次のとおりである。

- 1 埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましい。
- 2 やむを得ず現状変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施すること。
- 3 発掘調査を実施する場合には、事前に文化財保護課と協議すること。

これにより、担当課である県教育局財務課と調整を重ねたが、計画変更は不可能であるということなので、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査については、今回は財務課の執行委任を受けて文化財保護課が直営で実施したが、今回は、昭和55年4月1日に設立された財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団を調査機関として指定して、調査についての協議を進めた。協議は財務課、文化財保護課、事業団の三者で行なわれ、調査区域、調査期間等について決定し、埼玉県と事業団は事業委託契約を締結した。県知事からは文化財保護法第57条の3に基づく埋蔵文化財発掘通知が、事業団からは同法第57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が文化庁へ提出され、昭和56年8月3日から発掘調査は開始された。

文化庁からは昭和56年8月11日付け委保第5の1796号をもって調査届を受理した旨の通知があった。

(井上尚明)

発掘調査の組織

1. 発掘整理（昭和56年度）

主 体 者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	長 井 五 郎
		副 理 事 長	沼 尻 和 也
		常 務 理 事	渡 辺 澄 夫
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管 理 部 長	伊 藤 悦 光
			関 野 栄 一
			福 田 浩
			本 庄 朗 人
発掘整理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調 査 研 究 部 長	横 川 好 富
		調 査 研 究 第 四 課 長	増 田 逸 朗
		調 査 研 究 第 三 課 長	谷 井 彪
			村 田 健 二
			石 川 俊 英

2. 発掘調査協力者

浦和市教育委員会及び地元関係者

Ⅱ 遺跡の立地と環境

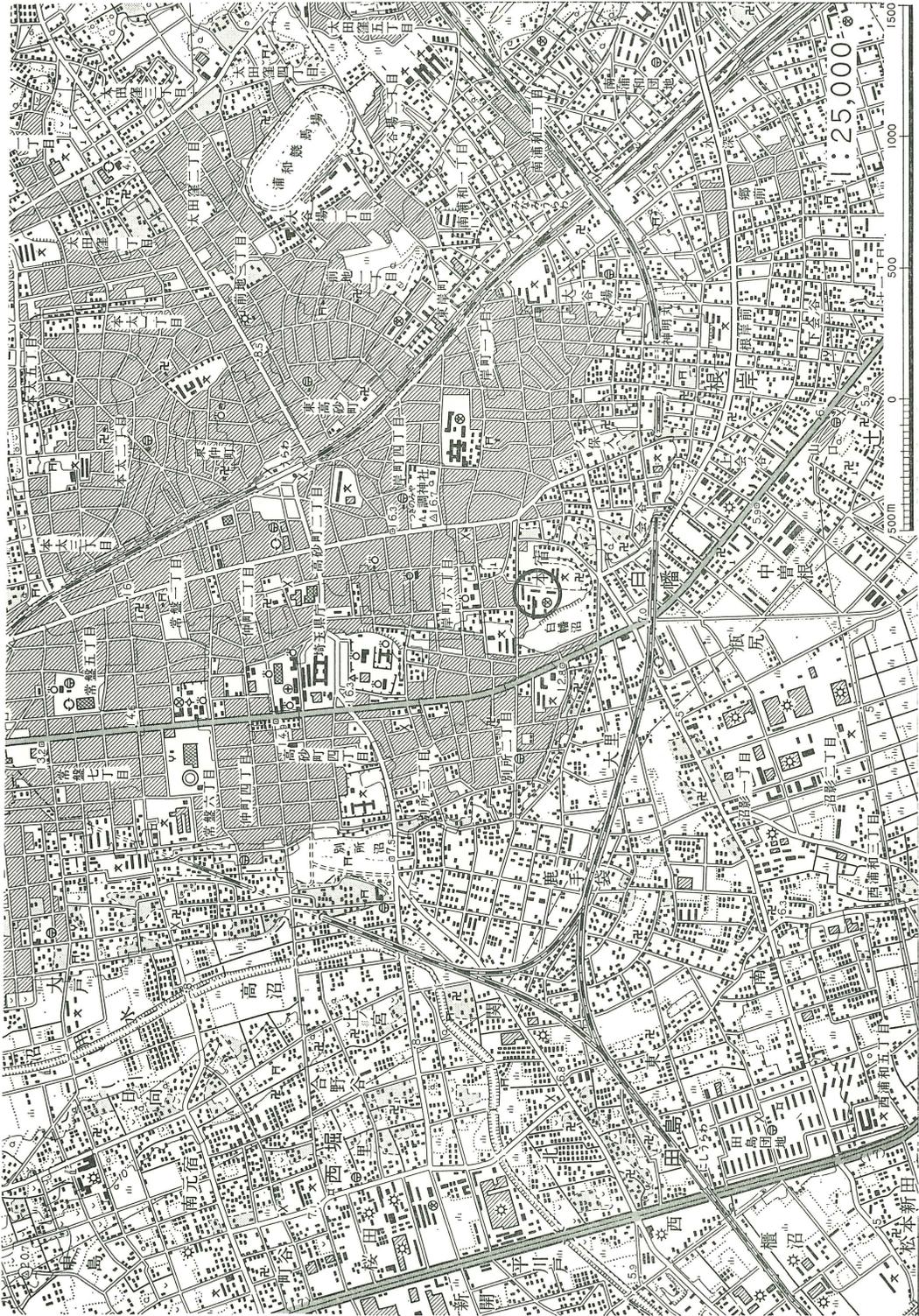
白幡本宿遺跡は浦和市白幡 582 番地に所在し、国鉄浦和駅より南西約 1 km 地点の所にある。本遺跡のある北足立台地（通称大宮台地）は関東平野のほぼ中央部に位置し、埼玉県北西部から南東にかけて広がる標高 15m 以下のなだらかな台地である。この台地を微細に見れば慈恩寺台地、鳩ヶ谷台地、浦和台地に分けられ、荒川を本流とする元荒川、稜瀬川、荒川によって開拆されたローム台地によって形成されている。遺跡の位置する浦和台地は大宮台地の東南部を占め、更に与野支台、浦和中央台地、片柳支台、鳩ヶ谷支台に分れ荒川低地をはじめとして多数の低地、枝状に発達した谷が深く浸入し複雑な地形をなしている。（須藤和人 1981 埼玉県地学のガイド）

本遺跡は浦和中央台地より西側に突き出た舌状台地で北及び南側に小さな支谷によって開折されている。標高は約 15m 程で現低地より比高差 7～8 m である。周辺部はわずかな田畑以外は宅地化され白幡沼が当時の面影を残す唯一のものとなってしまった。

現在白幡本宿遺跡は白幡中学校、浦和商业高校の敷地をはじめ多くの公共施設、一般住宅が林立し、遺跡の明確な範囲すら把握することは困難な状況となっている。今回発掘の対象地域は昭和 54 年県教委が体育館建設のため発掘調査を実施した地点に隣接した旧体育館の部分である。又、周辺



第 1 図 遺跡の位置(1)



第2図 遺跡の位置(2)

地形も大きく変容しており、旧景はほとんど止めていない。

前回の発掘調査では、弥生時代末期から五領期にかけての住居址が5軒、古墳4基、土壙6基、溝3本が確認されており出土遺物も縄文前期から古墳時代前期までの長期に渡る種々な遺物が検出されており、古い段階の集落も想定されている。(庄野靖寿他 1981)

周辺遺跡には、同一台地上に白幡中学校敷地遺跡がある。昭和51年の新校舎建設に伴う浦和市教委の調査では縄文草創期、稲荷台式期の住居址1軒、縄文晩期、荒海式期の住居址2軒、古墳時代、五領式期の住居址2軒が検出されている。(青木義脩他 1977)

又、浦和市教育委員会によれば、最近多くの調査が実施されており、特に白幡遺跡に密接な関係をもつ弥生後期～古墳時代の例として馬場北遺跡が注目される。以下、最近の調査例を列挙すると

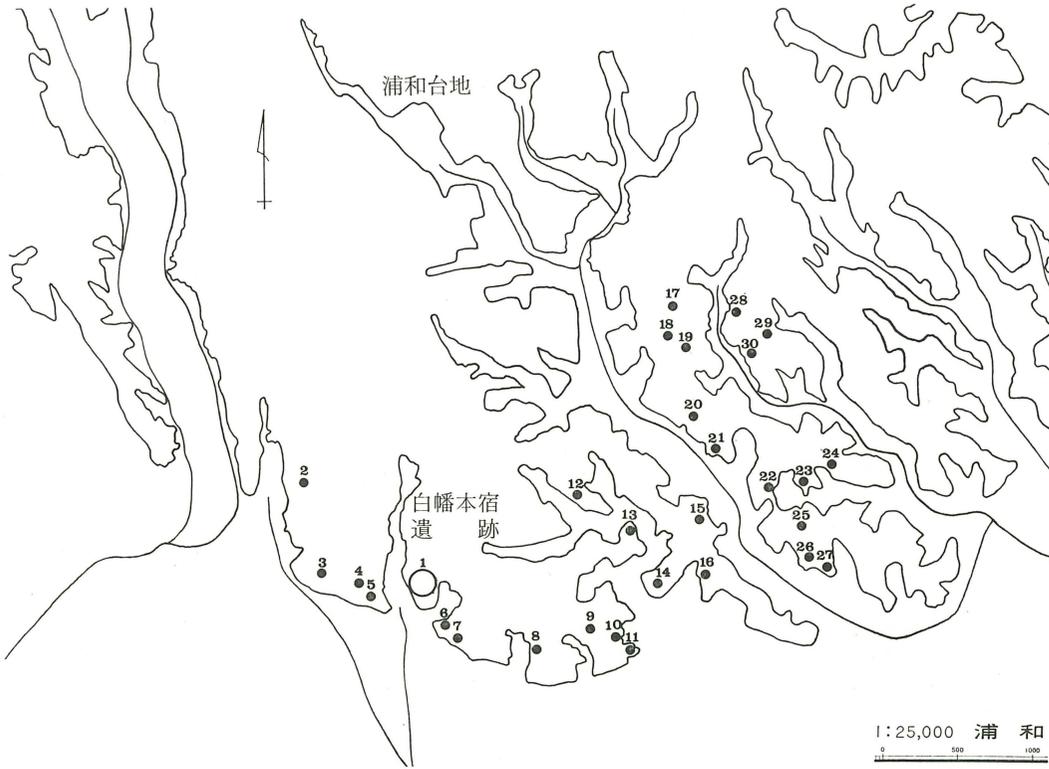
- 松ノ木遺跡 (プレ、縄文早期、井草式、中期、晩期、弥生中期、宮ノ台式期住居址1軒)
- 松ノ木北遺跡 (早期、ファイヤーピット、弥生後期住居址1軒、国分式期住居址3軒、中世火葬墓)
- 北宿遺跡 (ファイヤーピット、縄文中期住居址1軒、板碑17枚、火葬墓6基)
- 西谷遺跡 (プレ、弥生後期住居址4軒、ファイヤーピット1基)
- 馬場北遺跡 (弥生後期住居址48軒、環壕を伴う。)
- 馬場遺跡 (第1次調査 縄文中期住居址3軒、土壙4基。第2次調査 現在継続中である。)
- 大北遺跡 (宮ノ台式期住居址5軒、土壙1基)

以上7遺跡を知ることができる。

(石川俊英)

Ⅲ 周辺遺跡の概要

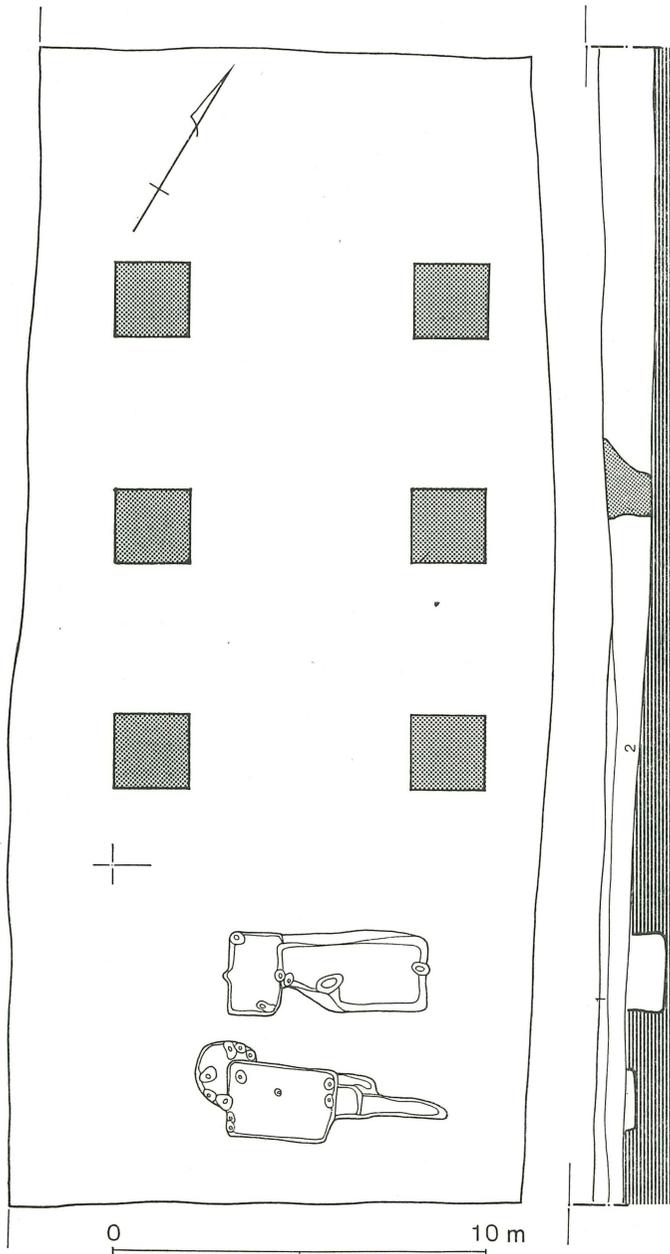
- 1 白幡本宿遺跡 先土器（ポイテト・スクレイパー） 縄文（稻荷台・茅山・関山・黒浜・諸磯・加曾利E・堀之内・安行・荒海式） 弥生（前野町式） 古墳（五領式） 青木他(1970) 庄野他(1980)
- 2 別所子野上（埼玉大学附属中学校内遺跡） 縄文（黒浜式） 古墳（五領式） 野辺(1972)
- 3 別所2丁目遺跡 縄文（堀之内式）
- 4 別所（別所小学校内遺跡） 縄文（加曾利E・堀之内式） 弥生（弥生町式） 古墳（五領式）
- 5 真福寺貝塚 縄文（黒浜式）
- 6 白幡上ノ台遺跡 縄文（堀之内式） 古墳（五領・鬼高式以降）
- 7 白幡貝塚 縄文（諸磯式）
- 8 根岸遺跡 縄文（関山・黒浜・諸磯・五領ヶ台・加曾利E式） 古墳（五領・鬼高式） 柳田・青木他(1964)
- 9 一ツ木遺跡 先土器（ポイント） 古墳（鬼高・国分） 宮内・青木他(1966)
- 10 大谷場貝塚 縄文（黒浜、諸磯、五領ヶ台、堀之内式） 青木他(1974)
- 11 大谷場東貝塚 縄文（黒浜、諸磯式）
- 12 前地遺跡 縄文（加曾利E、堀之内式）
- 13 大谷場中町遺跡 縄文（茅山、堀之内式）
- 14 大谷場上町遺跡 縄文（加曾利E、堀之内式）
- 15 大谷場下町遺跡 縄文（堀之内式）
- 16 大谷場小地下遺跡 縄文（茅山、黒浜、加曾利E、堀之内、安行式） 弥生（弥生町式）
- 17 原山西原遺跡 縄文（加曾利E、堀之内式）
- 18 原山大在家遺跡 縄文（加曾利E式）
- 19 諏訪入遺跡 縄文（加曾利E式）
- 20 太田窪本村遺跡 縄文（加曾利E・堀之内式）
- 21 太田窪堀之内遺跡 室町（城館）
- 22 善前北遺跡 縄文（加曾利E式）
- 23 大谷口向原遺跡 縄文（加曾利E、堀之内式）
- 24 明花遺跡 縄文（加曾利E・称名寺・堀之内・加曾利B式） 三友他(1968)
- 25 善前南 縄文（堀之内・加曾利B式）
- 26 領ヶ谷城遺跡 室町（城館）
- 27 太田窪貝塚 縄文（黒浜・諸磯・堀之内式）
- 28 大谷口細野北 縄文（加曾利E・堀之内式）
- 29 大谷口細野 縄文（加曾利E・堀之内式） 古墳（鬼高式）



30 大谷口細野南 縄文（堀之内式）

以上第3図、及び周辺遺跡は浦和市遺跡地図地名表を参考にして作成した（浦和市教育委員会 1978）

Ⅳ 調査の経過 (日誌抄)



第4図 遺構配置図

昭和56年7月14日、浦和商业高校の関係者立ち会いのもと最後の打ち合わせを行ない、8月3日調査対象地である旧体育館跡地(東西14m、南北30m)に重機を導入、表土の除去を開始する。遺構確認面は、近接する第一次調査のデータとは異なり、1mを越える厚い表土に覆われていた。さらに、撤去された旧体育館の基礎部分と思われる掘り込みが調査区各所に認められた。調査は埋設された水道、電気番様々な配管を避けて行なわれ、中央部に未掘区を設け、南北2つの調査区を同時に進行させた。精査の結果、確認面は全てハードローム面中位であり、極めて早い時期に削平が進行したことを物語っていた。遺構は2軒の竪穴状遺構(住居址)と室状遺構1基が検出されたに過ぎず、遺物も皆無に近い状態であった。

調査は、以上の貧弱な遺構内容であることも手伝

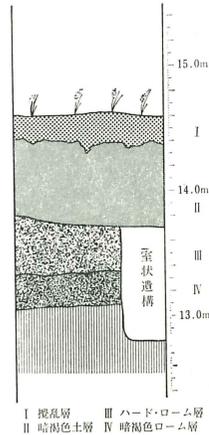
い、写真撮影、測量、旧石器調査等順調に進行し、8月20日には全ての作業が終了した。

(村田健二)

V 遺構と出土遺物

前述の通り、検出された遺構は竪穴状遺構（住居址）2軒、室状遺構1基であった。それらのいずれもがそうである様に、遺物は皆無に近い。表採、確認時で得られたものも全くのゼロであった。以下個別の遺構について事実部分を報告する。

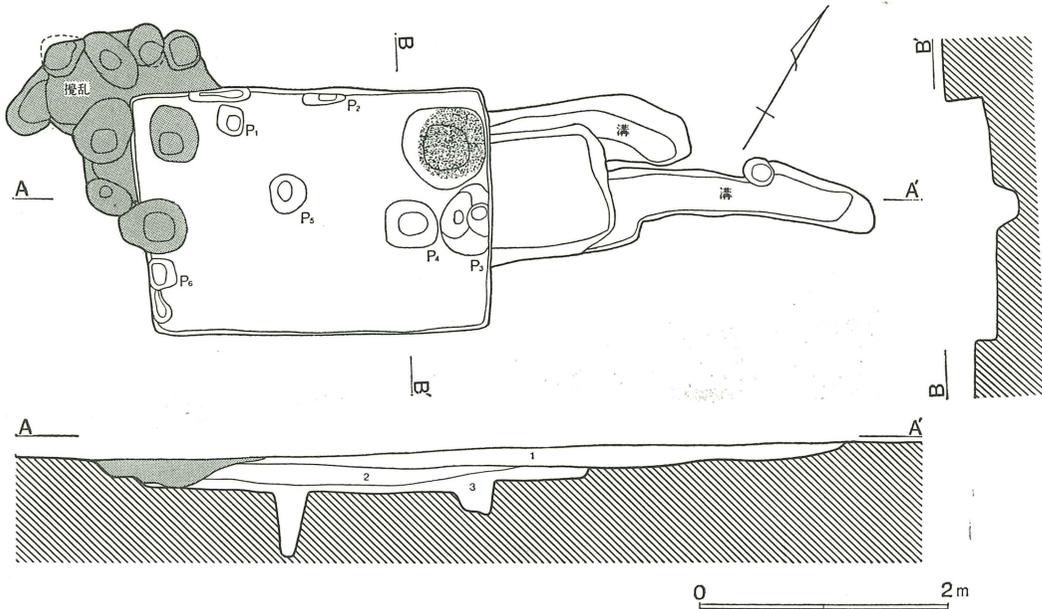
なお、調査区の土層堆積は第4図の通りである。



第5図 土層柱状図

第1号住居址（第6、7図、第1図版）

本址は、調査区の南端部で検出された小竪穴状の遺構である。重複関係は本址と同方向に走る2本の溝状遺構との間にあり、本址が切られて存在する。さらに、西壁部は攪乱によって大きく抉られている。規模は、東西2.8m、南北1.95mの長方形プランを呈する。また、東壁中央部には一辺1mの方形張り出し部をもつ。中軸線（長軸）の示す方位はN-59°-Eである。壁体はほぼ垂直に、平均25~30cm程の掘り込みをもち、コーナー部は鋭く屈曲する。床面はフラットで硬度も極めて高い。ピットは6個検出されたが、P₁~P₃、P₆は壁下であり、平均15cm程の浅い掘り込みに過ぎない。一方P₄、P₅は深さ30cmを測り、上屋構造との因果関係も強いものと考えられる。炉址は、北東コーナー付近に位置し、径86cm、深さ10cm程の浅い皿状を呈する。焼土は東側に厚く、広く分布しており、赤白化した範囲も含めると径60cm程の規模とな



第6図 第1号住居址実測図

る。出土遺物は、南西コーナー付近、床上20cmほどで出土した2片の古瀬戸碗が出土したに過ぎず、廃絶時期を決定するにはやや困難と思われる。

(村田健二)

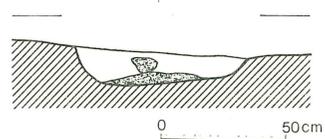
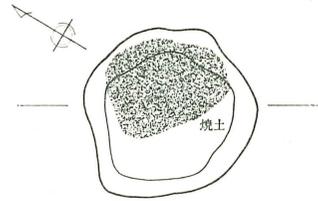
第2号住居址および室状遺構 (第8図、第5図版)

1号住居址の北側に隣接し、長軸をほぼ90°転じて方位N—30°—Wを示す。確認時の所見では、ロームを含んだ攪乱部分を除去した結果、2号住居址に付随して東側に室状遺構が確認された。

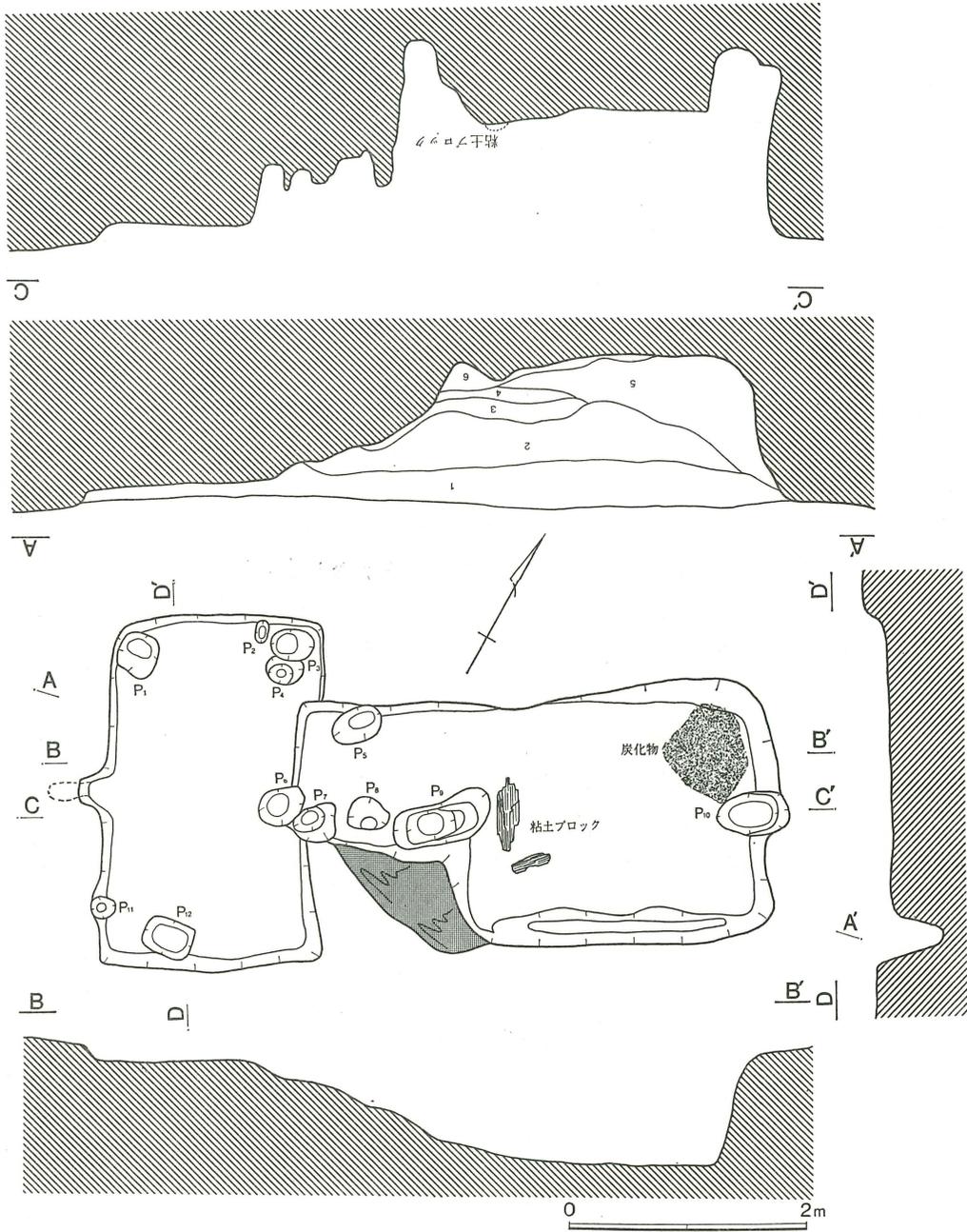
2号住居址は、南北3m、東西1.7mを測る長方形プランである。覆土は確認面より床面までの掘り込みが平均10cm~20cm程で、そのため確認した層は暗黄褐色の単一層であった。コーナー部はほぼ直角に屈曲し、壁際は床面よりほぼ垂直に立上っている。ピットは全部で6個検出された。P₁、P₃、P₄、P₁₂、P₁₃については、プラン、形状、配置、掘り込みが不統一であるが柱穴と考えられる。床面は硬く叩きしめられ、ほぼ平坦である。出土遺物は皆無である。

室状遺構は、東西4m、南北2m程の長方形プランを呈す。南東壁の一部が攪乱のため破壊されているが良好な状態で検出された。覆土は6層に分割可能であるが、大半はⅡ~Ⅳ層のロームを主体とする暗褐色土で、ローム混入の密度はⅣ→Ⅱの順に高くなる。ピットは6個検出されている。規模は一様に径が40cm×20cm程の楕円形を呈するものが多いが、P₁₀は60cm×35cmを測り検出したピット中最大値を示す。ピットの配列は、P₅を除いてP₆からP₁₀までほぼ長軸に合わせて一直線に並んでいる。掘り込みは10cm~80cmと著しい差が認められる。遺構の断面はB—B' (第7図)に示した通り中央部から約20°の傾斜をもって立ち上がる。コーナー部はほぼ直角に屈曲し、壁際は起伏に富み確認面から垂直に掘り込まれている。東壁下より幅30cm、深さ20cm、長さ1.5m程の壁溝と考えられる落ち込みが確認された。特に東壁側、及び西壁側では中央部を境として比高差が約15cmを測る。北西壁コーナー、南東壁に隣接して焼土ブロックを大量に含んだ炭化物、粘土ブロックが床面に張り付いた状態で検出した。本遺構からも遺物は全く出土していない。

(石川俊英)

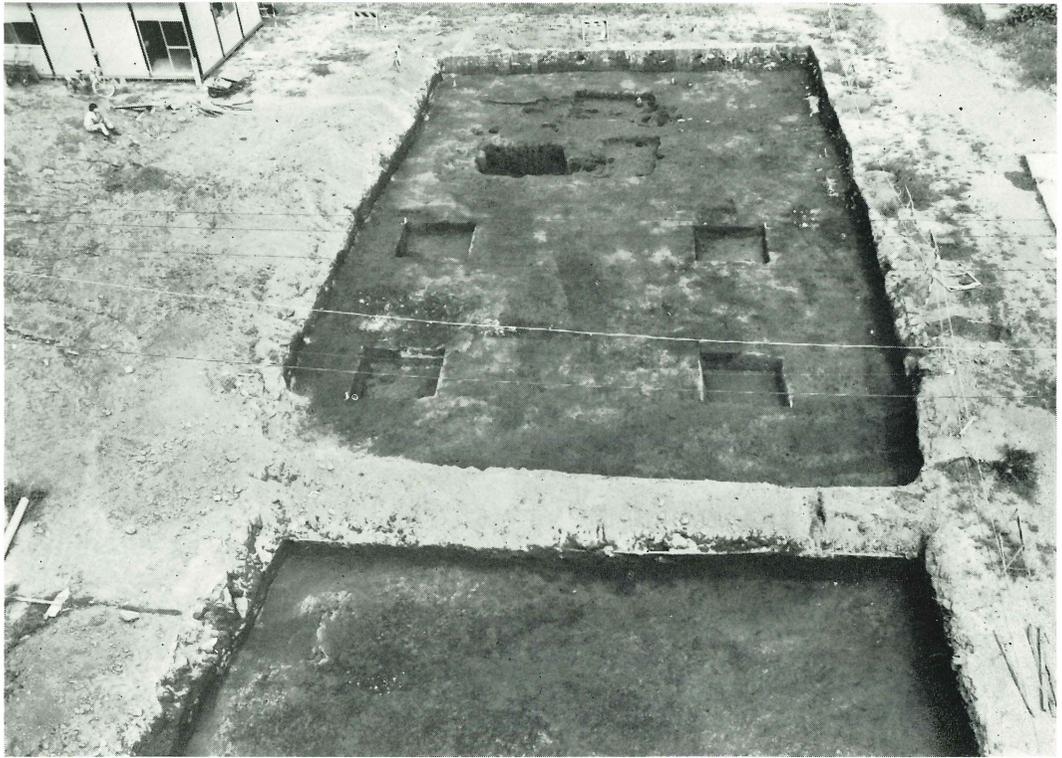


第7図 第1号住居址実測図



第8図：第2号住居址実測図

版 圖



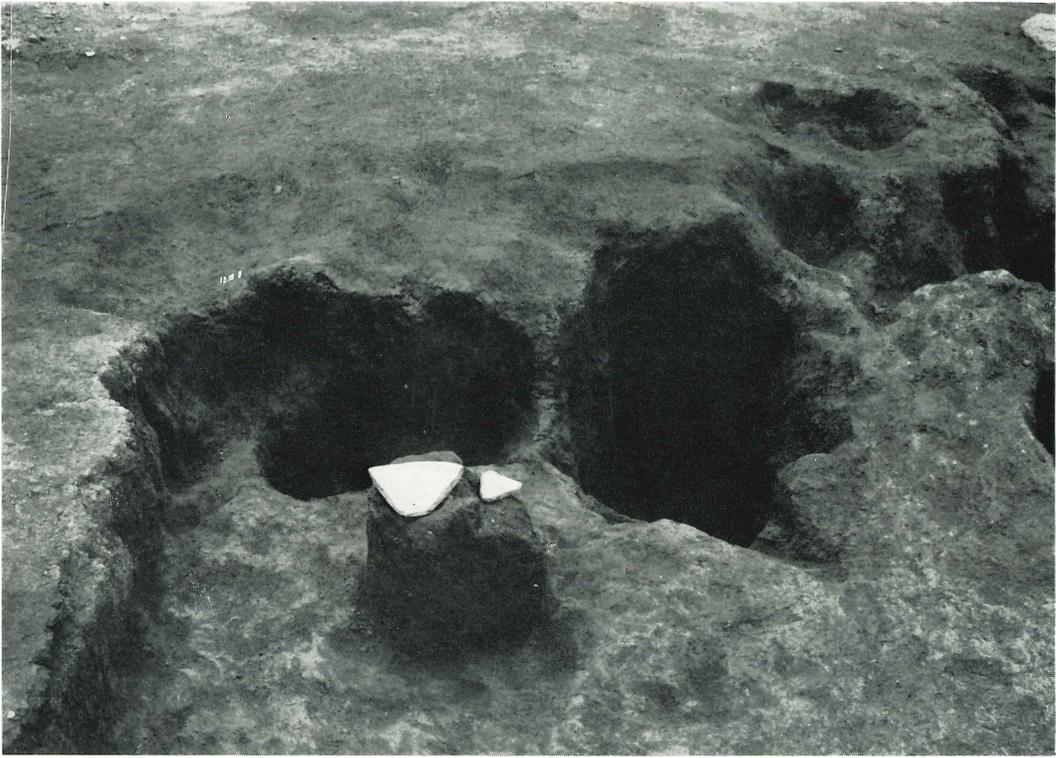
調査区全影（西より）



第1号住居址、第2号住居址および室状遺構



第 1 号住居址全景



第 1 号住居址、古瀬戸出土状況



古瀬戸出土状況（近影）



第 1 号住居址炉址



室状遺構（南より）



室状遺構断面図（西より）



室状遺構入口部（北より）



粘土ブロック出土状況



炭化物出土状況

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第14集

白幡本宿遺跡（Ⅱ次）

昭和57年 3月20日印刷

昭和57年 3月31日発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

印刷 アサヒ印刷株式会社